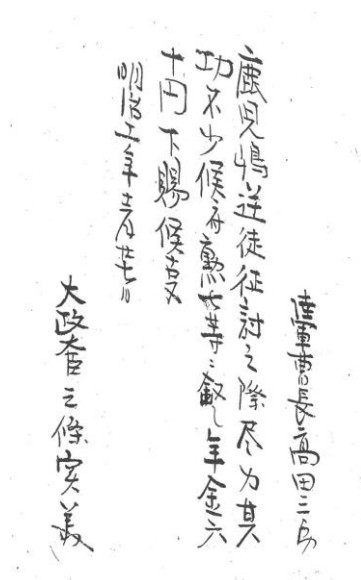


## 小展示 Vol.5

## 川崎市公文書館所蔵資料から見る

## 井伊家譜代家臣松宮家の取立と変遷 II



## 【幕末維新期の井伊家と松宮家】

井伊家は幕府側につき慶応元年（1865）幕長戦争に出兵したが、慶応三年（1867）大政奉還を経て、明治元年（1868）年戊辰戦争が起きると、彦根藩は新政府方として戦った。それ以後も井伊家と松宮家の関係が続いていた。「御書付之写（東征出張中尽力により羅紗陣羽織・金1万疋下賜につき書付）」（A-2-1 松宮家文書）という資料から、松宮弥太夫という人物が戊辰戦争中、徳川慶喜を追う東征軍に井伊家の家臣として従軍し、彦根藩から褒賞をもらっていることがわかる。松宮家は維新後も井伊家に仕えていたことがわかる。また、「（東征中勤労により米10俵宛行につき申渡状、後欠）」（A-2-1 松宮家文書）によれば、松宮弥七郎という人物は戊辰戦争で功績を挙げたのか、永世禄を年10俵もらっている。松宮弥太夫は松宮弥七郎と松宮弥太夫が同一人物であるか別人であるかは現時点では不明である。

## 【三条実美】

天保8年（1837）京都に生まれる。勅使など役職を歴任した後、明治4年（1871）には太政大臣兼神祇伯宣教長官に任命される。明治22年（1889）10月25日臨時で内閣総理大臣を兼ねるが、12月24日内閣総理大臣を免じられ、明治24年（1891）死去した。

## 【三条実美の立ち位置】

以前は業績がよくわからず歴史学上評価の低かった三条実美であるが、明治維新以来、三条実美が果たした主な役割は、脆弱な新政府を人格でもって担保し、また藩閥の寄り合いで遠心分離を起こしやすい政権内にあって、バランスをとつとめ、国家と政府の「根軸」となることであった

との評価がされている（。また、維新に際して江戸近郊の関東地域では旧幕府勢力と新政府軍との間で戦闘が起き、200 年以上も天下泰平を謳歌してきた人々にとって、江戸に侵入してきた新政府軍は迷惑千万な存在であった。村や町が戦禍にあった体験からは、馴染みの薄い新政府よりも、慣れ親しんだ旧幕府を慕う気持ちが湧いてきても不思議ではない状況で、三条実美は迅速に治安維持を図り、人心を新政府に惹きつける必要があった。封建時代の為政者にふさわしい高い門地と徳望を有しながら、開明的で近代化路線への適応力を備えていたことは、近世から近代という過渡期のリーダーとして理想的だったとも言われている。

#### 【三条実美と高田三郎】

展示資料の「(鹿児島逆徒征討の尽力により金 60 円下賜につき通達)」(A-2-1 松宮家文書)は、当時太政大臣三条実美が高田三郎に宛てた書簡である。西南戦争に出征したことで高田が褒賞金をもらうことになったことを知らせるものであり、高田三郎は軍人であったことがわかる。また、三条実美という当時政府でトップの人物から下賜されるということは、軍人である高田にとって大変名誉なことであったと同時に、それだけ良い功績を挙げたということが、資料から推測できる。

#### 【高田三郎と松宮弥七郎】

三条実美から書簡をもらった高田三郎とは、「(年賀の書状)」(A-2-3) という明治期の資料の差出から、「加州金沢営所第 7 連隊第 2 大隊第 1 中隊陸軍曹長」の身分であることがわかる。この資料は当時平塚に住んでいた松宮弥七郎に宛てたものである。

そして、「(井伊家より下賜の産業補助金を郵便局換にて送付につき葉書)」(松宮家文書 A-2-3) の差出「江州犬上郡彦根町字鷹匠 松宮重太郎」・受取「相州大住郡平塚駅 松宮弥七郎殿」と資料にあるように、井伊家のお膝元近江にも松宮の家がある中、松宮弥七郎は関東に住んでいたことがわかる。この高田三郎と松宮弥七郎という二人の人物の資料を整理していくと、高田は松宮弥七郎と知り合い、その関係で年賀の書状などを交換する中になり、結果として今日まで三条実美が高田に宛てた書簡の写しの可能性のあるものが松宮家に現存することになったことが推測できる。

#### 【参考文献】

- ◆野田浩子『家からみる江戸大名 井伊家 彦根藩』(2023 年)。
- ◆木村礎・藤野保・村上直編『藩史大事典 全八巻 第 5 巻 近畿編』(1989 年)。
- ◆刑部芳則『三条実美 孤独の宰相とその一族』(2016 年)。
- ◆内藤一成『三条実美 維新政権の「有徳の為政者」』(2019 年)。

#### 【翻刻】

陸軍曹長高田三郎

鹿児島逆徒征討之際尽力其

功不少候<sup>ニ付</sup>勲七等<sup>ニ叙</sup>し年金六

十円下賜候事

明治十一年十一月廿七日

太政大臣三条実美